

# 琉球大学学術リポジトリ

教職課程を履修する学生は学校図書館をどのように捉えているのか？：

琉球大学学生への学校図書館利活用経験に関するアンケート調査から

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄県図書館協会 公開日: 2016-09-08 キーワード (Ja): 教育課程, 学校図書館, 学校図書館活用, 教職科目, 教員養成 キーワード (En): 作成者: 望月, 道浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/35225">http://hdl.handle.net/20.500.12000/35225</a>

# 教職課程を履修する学生は学校図書館をどのように捉えているのか？ —琉球大学学生への学校図書館利活用経験に関するアンケート調査から—

望 月 道 浩

## 要約

2009年度から2011年度にかけて、琉球大学の教職科目（「教育課程」科目）を履修する学生に対し、各自の小学校・中学校・高等学校時代を振り返ってもらいながら学校図書館の利活用経験に関するアンケート調査を実施した。調査対象者は390名（回答者数262名）である。学生の学校図書館の授業での利活用経験の実態は、「図書館の利用の仕方」、「本の並び方（分類）」、「本の探し方（目録）」、「百科事典などの使い方（索引）」については、概ね学習経験があるものの、「レポートの書き方」、「引用の仕方」については、8割以上学習経験がないと回答した。教職課程を履修している学生にとって、高等学校段階までの学校図書館利活用経験がない場合、教員として最低限必要と思われる図書館機能への理解度についても否定的な回答をしていることが明らかとなった。

## 1. はじめに

大学では、主に大学新生を対象に高校からの円滑な移行をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を成功させるべく総合的につくられた教育プログラムとしての初年次教育に取り組んでいる場合が多い。大学図書館においても、初年次学生向けの図書館ツアーはもとより、基本的な図書館活用ガイドブックの作成・提供、レ

ポートの書き方ワークショップを開催するなど学生への指導的な情報サービスの提供に精力的に取り組んでいる<sup>1</sup>。このような取り組みは、学生が大学で必要な学習技術の獲得のために押さえておくべき図書館の利用方法について、必ずしも高等学校卒業段階までに十分に身につけていない現状があることに起因しているのではないだろうか。仮に、小学校から高等学校段階に至る過程において、学校図書館機能を利活用した学習が実践されてきたとして、その体験・経験をしてきたであろう現在の大学生は、学校図書館をどのように捉えているのだろうか。

現行の学習指導要領のもとにおいても、小学校から高等学校段階まで、教育活動全体を通じた読書活動を推進すること、学校図書館を計画的に利活用することなどにも留意することが引き続き重要とされている。とくに教員免許状取得を希望する学生にあっては、学校図書館の利活用について学校図書館司書教諭資格（以下、司書教諭資格と略す）取得の有無を問わず、教職に就いた場合に意を払わなければならないことでもある。

そこで本研究では、教員養成を担う教職課程認定大学の1つである琉球大学において、教職課程を履修するすべての学生が司書教諭資格を取得するとは限らない状況<sup>2</sup>であることを踏まえつつ、教職をめざそうという学生たちが、学校図書館機能を利活用した経験を

どのように捉えているのか明らかにしようとするものである。殊に琉球大学が所在する沖縄県では、琉球政府時代の1960年代より、学校図書館への人の配置がなされてきた経緯もあり、現在もなお学校図書館事務職員としてのいわゆる「学校司書」の配置率については、公立小学校・中学校・高等学校のいずれにおいても、ほぼ全校配置に近い高い割合を示してきた<sup>3</sup>。琉球大学では、地元沖縄出身の学生が多いことから<sup>4</sup>、義務教育段階から「人（いわゆる学校司書）」の居る学校図書館での利活用経験を長きに亘り経ていることが推察される。

また、1997年の「学校図書館法」一部改正に伴い、2003年4月以降、司書教諭有資格者の配置義務化が謳われている<sup>5</sup>。そこで本稿では、同法の一部改正後、及び、司書教諭配置義務化後10年が経過しようとする中、教職をめざす学生の学校図書館の利活用経験の実態について明らかにするとともに、教職課程を履修する学生にとって、生涯学習の礎としての学校図書館機能の利活用経験がどのように認識されているのかについても明らかにしようとするものである。

## 2. 先行研究の動向と本研究の位置づけ

大学生の図書館利用に関わる研究については、石川清治による大学での授業形態が学生の図書館利用に及ぼす影響についての論考<sup>6</sup>をはじめとして、1965年以降散見される。1970年代半ばには、大学図書館における学生への利用者教育のあり方を探る一環として、学生の図書館利用実態調査を実施している傾向が強まった<sup>7</sup>。これらはいずれも、大学図書館の利用実態を主とした調査であり、調査対象者である学生の過去の学校図書館利用実態

にさかのぼって調査がなされたわけではない。本研究に関わり嚆矢となる研究の一つに、岡田靖の調査研究が挙げられる<sup>8</sup>。岡田は図書館利用者である学生の図書館蔵書目録への興味・関心・理解の度合いについて学年による特徴を把握する目的で、1977年と1992年の二度に亘り首都圏9大学の学生を対象として調査を実施している<sup>9</sup>。調査時点での図書館利用実態の把握が主となる調査ではあるが、調査対象者が中学校・高等学校段階で受けた図書館教育経験の有無も含めて調査がなされている。この岡田の研究に基づきながら、中島正明は安田女子大学にて学生への調査を実施しており<sup>10</sup>、また、佐藤充昭は、岡田との共同研究として九州・沖縄地区大学の学生を対象に調査を実施している<sup>11</sup>。

一方、鈴木嘉弘は、常葉学園大学学生に対し調査を実施している<sup>12</sup>。鈴木の調査では、先に挙げた岡田の調査と比較し、調査対象者である学生自身の小・中・高校生時代を振り返らせながら、それぞれでの図書館利用状況について、図書館が有する分類・目録の機能についての利活用実態を把握するためのより具体的な質問項目とともに調査がなされている。大学生の図書館利用経験と意識に関する仔細な調査としては数少ない先行研究の一つである。

しかしながら、これらの先行調査研究については、いずれも1997年の「学校図書館法」一部改正以前の調査である。同法一部改正後の先行研究としては、川原亜希世が北陸学院短期大学学生に対して行った調査<sup>13</sup>、及び、野口武悟が所属するS大学学生に対して実施した調査<sup>14</sup>が挙げられる。

川原の研究では、司書資格科目の1つである「情報サービス論」受講者への調査であり、

主として学生の持っている図書館像・司書像を考察する目的となっている。川原は、受講学生の多くが図書館や本に親しみをもち、日頃から図書館へ通い、図書委員を経験してきた者も多かったにも関わらず、多くの学生が図書館の基本的な利用法を身に付けていない実態もあることに矛盾を感じていた。そこで、川原は、1999年度と2000年度の当該科目受講学生（1999年度31名、2000年度23名）を対象として、①文庫、小学校・中学校・高校の図書館、短大図書館、公共図書館の利用経験、②図書委員・調べ学習の経験の有無、についてレポートとして課し、そのレポート内容の分析を行なっている。

野口の研究では、所属学部の改組に伴い開設された初年次教育科目である「基礎ゼミナール」<sup>15</sup>の担当に関わり、学生自身がこれまで図書館（学校図書館や公共図書館）を利用した経験がほとんどないという者もいる課題に直面したことが明かされている。野口は、当該科目で取り扱う内容でもある図書館の活用に関わり、教員側が初歩的かつ基本的と考えていた内容であっても、学生のレディネスはそれ以前の実態にあるのではないかという仮説に基づき、当該科目における図書館に関する指導のあり方を検討している。その際、学生の図書館利用経験と意識を把握するため、2010年5月に所属のJ学科の新入生127名を対象に「図書館に関するアンケート」として、小学校から高等学校までの学校図書館の利用経験（授業での利用を除く）、及び、小学校から高等学校までの公共図書館の利用経験を尋ねている。

川原や野口の調査結果からは、学生の図書館の利用という観点から見れば比較的良好に利用していると考えられる。しかしながら、学

生は学校図書館や公共図書館を利用してきたとしても、学校段階が進むにつれ利用の内実は、ブラウジングで見つけた資料を利用することや受験勉強等での座席利用のみに留まっている実態も明らかとなっている。大学で学ぶ学生の多くが高校卒業までに必ずしも十分な図書館のもつ機能を活用するための利用教育を受けていないということである。これらの考察の背景には、調査対象者である学生の多くの出身地において、学校図書館に担当教職員（司書教諭やいわゆる学校司書）が配置されていない状況があることもその一因ではないかとの指摘もある<sup>16</sup>。

本稿では、上記先行研究に基づきながら、以下の2つの観点から考察を加えることを目的とする。第一に、将来教職をめざす可能性のある教職課程を履修する大学生は、これまでの学校図書館利活用経験をどのように認識しているのか明らかにすることである。第二に、教育職員免許法上の免許取得要件となる、教育課程及び指導法に関する科目（本稿では、「教育課程」科目を取り上げる）において、学校図書館機能の利活用について取り扱うことの意義について考察を加えること、の2点である。

## 2. 調査概要

### 2. 1. 調査の目的

教員免許状取得を希望する学生に対して、各自の小学校から高等学校段階までの学校図書館利活用経験から学校図書館機能の認識状況を調査し、その結果を集計・分析することにより、当該学生の学校図書館機能への認識を探るとともに、今後の教員養成及び学校図書館における児童生徒への情報・メディアを活用する教育のあり方や展望について検討する。

## 2. 2. 調査の方法

調査にあたっては、2009年7月28日（2009年度前学期）、2010年7月27日（2010年度前学期）、2011年4月12日（2011年度前学期）、2012年1月26日（2011年度後学期）の4回に亘り実施した。対象は、筆者が琉球大学において担当している教職に関する科目の「教育課程」並びに「教育方法」を履修する学生（教員免許状取得希望者；琉球大学において上記2科目はセットで履修することが履修登録条件となっている）である。当該履修学生へは、質問紙によるアンケートの趣旨説明、及び、回答への協力を依頼し、当該講義時間内に15分程度の回答時間を確保し、その後回収まで行った。

調査対象者数は、各学期の上記科目履修登録者となるが、その内訳は、2009年度前学期101名、2010年度前学期110名、2011年度前学期83名、2011年度後学期96名の合計390名である。回答者数は262名であった。

## 2. 3. 調査項目

周知のように、平成10年文部省告示の学習指導要領より「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。」が謳われ、2003年4月1日以降の司書教諭配置義務化とともに学校図書館の機能の活用を図ることが求められている。

学校図書館の機能として考えられうるものには、学校図書館担当者が果たすべき職務として、たとえば全国学校図書館協議会が作成する「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」や「学校図書館職員の職務内容(案)」を確認することである程度把握することができる<sup>17</sup>。

本調査においても、全国学校図書館協議会が作成する上記の指導体系表や職務内容(案)に示された取り組みが、学校図書館の機能の活用状況として顕れているのであれば、学生の学校図書館利活用経験に大きく影響するものと考えている。だが、この調査では、前述の体系表などに示された仔細な項目をそのまま調査項目として設定はせず、主に「分類」、「目録」、「百科事典」、「レポート」における学校図書館の利活用という観点からの調査項目を設定しアンケートを実施した。調査の各項目の内容については、以下の単純項目集計の部分で逐次述べることとする。

## 3. 単純項目集計

全データの262件に関して、各質問項目順に集計結果を見ることとする。

設問1、2、3の卒業高校（都道府県、設置者別、学科）や設問4、5、6、7の男女別、現浪別などについては、今後のクロス集計を行う上で参考にした。

卒業高校の所在地（都道府県）については、沖縄県が78.5%を占めている。

本調査では、現役入学生と浪人し入学した学生の両方を含んでいる。現役入学生は68%となっているが、高等学校卒業年度については、2006年度から2010年度に卒業した者が94%を占めている。少なくとも高等学校段階から司書教諭配置義務化後の学校生活を経験している学生である。

設問8から設問13は、学生自身の「図書館の利活用について」尋ねている。さらに、それぞれの設問において、「A 高校までの授業で学習したことのある内容か」、「B 現在自分が理解し、活用できる内容だと思うか」、「C 今後大学で、さらに詳しく学びたい内

容か」の3つを問い、〈過去－現在－未来〉の学生の意識を問うものとした。

- [設問8] 図書館の利用の仕方について  
 [設問9] 図書館での本の並び方(分類)について  
 [設問10] 図書館での本の探し方(目録)について  
 [設問11] 百科事典などの「索引」の使い方について  
 [設問12] レポートの書き方について  
 [設問13] レポートや論文を執筆する際の「引用」の仕方について

本稿では、A、Bの集計結果を中心に以下述べることとする。

- A 高校までの授業で学習したことのある内容ですか?  
 Y:Yes N:No  
 B 現在自分が理解し、活用できる内容だと思いますか?  
 1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分からない

まず、設問8から設問13について、「A 高校までの授業で学習したことのある内容か」どうか尋ねたところ表1のような結果が示された。なお、以下本稿において示す表内の集計数値について、2段表記としているが、上段は回答者数(度数)を表し、下段は割合(%)を表している。

表1 高校までの授業で学習したことのある内容か

設問	Y	N	無回答	計
8	174	85	3	262
	66.4	32.4	0.8	100.0
9	132	128	2	262
	50.4	48.9	0.8	100.0
10	154	107	1	262
	58.8	40.8	0.4	100.0
11	164	93	5	262
	62.6	35.5	1.9	100.0
12	29	227	6	262
	11.1	86.6	1.9	100.0
13	40	214	8	262
	15.3	81.7	1.9	100.0

「図書館の利用の仕方」、「本の並び方(分類)」、「本の探し方(目録)」、「百科事典などの使い方(索引)」については、概ね半数以上の学生が高校までの授業で学習したことのある内容として回答している。しかし、「レポートの書き方」や「引用の仕方」については、8割以上の学生が高校までの授業では学習したことがないと回答している。

続いて、設問8から設問13について、「B 現在自分が理解し、活用できる内容だと思うか」どうか尋ねたところ表2のような結果が示された。

いずれの設問においても、肯定的回答の割合が66.8~76.7%の結果として示されている。Aの集計結果において、「No」と回答した割合の高い設問である、「本の並び方(分類)」、「レポートの書き方」、「引用の仕方」については、Bの集計結果においても、他の設問と比べ否定的回答の割合がやや高い傾向が示された。

表2 現在自分が理解し、活用できる内容だと思うか

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
8	7	32	116	85	18	4	262
	2.7	12.2	44.3	32.4	6.9	1.5	100.0
9	9	60	100	75	16	2	262
	3.4	22.9	38.2	28.6	6.1	0.8	100.0
10	8	48	109	76	14	7	262
	3.1	18.3	41.6	29.0	5.3	2.7	100.0
11	9	40	77	120	10	6	262
	3.4	15.3	29.4	45.8	3.8	2.3	100.0
12	12	50	86	95	14	5	262
	4.6	19.1	32.8	36.3	5.3	1.9	100.0
13	17	51	82	97	11	4	262
	6.5	19.5	31.3	37.0	4.2	1.5	100.0

設問14から設問20は、学校図書館を活用した授業に関する回答者の意識を調査する項目である。各設問項目の内容は下枠に示した。結果は表3の通りである。

<p>[設問14] 図書館を使った授業は日常生活で必要である。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p> <p>[設問15] 図書館を使った授業は将来仕事をしていく上で必要である。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p> <p>[設問16] 図書館を使った授業は大学で役に立っている。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p> <p>[設問17] 中学校までの図書館を使った授業は高校で役に立った。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p> <p>[設問18] 小学校までの図書館を使った授業は中学校で役に立った。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p> <p>[設問19] これまで学校で図書館を使った授業は楽しかった。</p> <p>1:全く思わない 2:あまり思わない 3:ややそう思う 4:そう思う 5:分らない</p>
--

これらの設問の目的は、2、3でも述べたように平成10年文部省告示の学習指導要領より謳われている学校図書館の活用が、学習者の側から見て意義のある取り組みとなっているかどうかを調査するためのものである。

表3 学校図書館を活用した授業に関する回答者の意識

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
14	13 5.0	78 29.8	100 38.2	56 21.4	11 4.2	4 1.5	262 100.0
15	7 2.7	77 29.4	87 33.2	71 27.1	15 5.7	5 1.9	262 100.0
16	12 4.6	72 27.5	74 28.2	60 22.9	38 14.5	6 2.3	262 100.0
17	31 11.8	93 35.5	67 25.6	42 16.0	25 9.5	4 1.5	262 100.0
18	27 10.3	76 29.0	77 29.4	51 19.5	27 10.3	4 1.5	262 100.0
19	7 2.7	44 16.8	101 38.5	85 32.4	21 8.0	4 1.5	262 100.0

回答結果については、概ね「ややそう思う」、「そう思う」といった肯定的回答が多く、設問において回答として示されているが、設問17の「中学校までの図書館を使った授業は

高校で役に立った。」や設問18の「小学校までの図書館を使った授業は中学校で役に立った。」については、「あまり思わない」、「全く思わない」が他に比べて高い割合を示している。これは、小学校から中学校へ、また、中学校から高等学校へと学習が進んでいく中で、「学校図書館の計画的な利用」という観点から、それぞれの校種間における計画的な利用に関わる教育課程の接続性が実現できていなかったことにも起因していると考えられる。一方で、設問19の「これまで学校で図書館を使った授業は楽しかった。」については、肯定的回答の割合が70%にもものぼっている。このことについて、設問20では、設問19の回答理由について自由記述で回答を求めているが、その理由を見ると、「調べ学習」や「読書の時間」としての授業を想起しながらの回答が多く見られた。図書館の多様な機能について知ることができる楽しさという理由は少なく、普通の教室での授業から学校図書館という異なる空間（雰囲気）で授業をする楽しさ、本を読むことのできる時間を確保してもらえる楽しさ、を理由に挙げる学生の回答もあった。

#### 4. クロス集計

##### 4. 1. 卒業高校所在地と図書館の利用の仕方について

単純集計の設問1の「卒業高校の所在地」について、「沖縄県」と「沖縄県外」の2項目を設定し、設問8から設問13について、「B 現在自分が理解し、活用できる内容だと思いますか？」とのクロス集計を行ったものが表4から表9である。

表4 卒業高校の所在地[設問1]と図書館の利用の仕方[設問8]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	5 2.4	22 10.7	98 47.8	64 31.2	13 6.3	3 1.5	205 100.0
沖縄 県外	1 1.8	10 17.9	18 32.1	21 37.5	5 8.9	1 1.8	56 100.0
無回答	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
合計	7 2.7	32 12.2	116 44.3	85 32.4	18 6.9	4 1.5	262 100.0

表4は、卒業高校の所在地[設問1]と図書館の利用の仕方[設問8]とのクロス集計結果を示したものである。

表4より、「図書館の利用の仕方」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は27人（13.1%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は162人（79.0%）であった。一方、「卒業高校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は11人（19.7%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は39人（69.6%）であった。

表5 卒業高校の所在地[設問1]と図書館の分類[設問9]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	7 3.4	44 21.5	83 40.5	57 27.8	13 6.3	1 0.5	205 100.0
沖縄 県外	1 1.8	16 28.6	17 30.4	18 32.1	3 5.4	1 1.8	56 100.0
無回答	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
合計	9 3.4	60 22.9	100 38.2	75 28.6	16 6.1	2 0.8	262 100.0

表5は、卒業高校の所在地[設問1]と図書館の分類[設問9]とのクロス集計結果を示したものである。

表5より、「図書館の分類」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は51人（24.9%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は140人（68.3%）であった。一方、「卒業高

校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は17人（30.4%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は35人（62.5%）であった。

表6 卒業高校の所在地[設問1]と図書館の目録[設問10]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	7 3.4	34 16.6	90 43.9	58 28.3	11 5.4	5 2.4	205 100.0
沖縄 県外	1 1.8	14 25.0	19 33.9	18 32.1	3 5.4	1 1.8	56 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 100.0
合計	8 3.1	48 18.3	109 41.6	76 29.0	14 5.3	7 2.7	262 100.0

表6は、業高校の所在地[設問1]と図書館の目録[設問10]とのクロス集計結果を示したものである。

表6より、「図書館の目録」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は41人（20.0%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は148人（72.2%）であった。一方、「卒業高校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は15人（26.8%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は37人（66.0%）であった。

表7 卒業高校の所在地[設問1]と百科事典などの索引 [設問11]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	8 3.9	30 14.6	62 30.2	93 45.4	8 3.9	4 2.0	205 100.0
沖縄 県外	1 1.8	10 17.9	15 26.8	27 48.2	2 3.6	1 1.8	56 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 100.0
合計	9 3.4	40 15.3	77 29.4	120 45.8	10 3.8	6 2.3	262 100.0

表7は、卒業高校の所在地[設問1]と百科事典などの索引 [設問11]とのクロス集計結果を示したものである。

表7より、「百科事典などの索引（の使い



方)」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は38人（18.5%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は155人（75.6%）であった。一方、「卒業高校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は11人（19.7%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は42人（75.0%）であった。

表8 卒業高校の所在地[設問1]とレポートの書き方 [設問12]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	10 4.9	40 19.5	64 31.2	77 37.6	11 5.4	3 1.5	205 100.0
沖縄 県外	2 3.6	10 17.9	22 39.3	18 32.1	3 5.4	1 1.8	56 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 100.0
合計	12 4.6	50 19.1	86 32.8	95 36.3	14 5.3	5 1.9	262 100.0

表8は、卒業高校の所在地[設問1]とレポートの書き方 [設問12]とのクロス集計結果を示したものである。

表8より、「レポートの書き方」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は50人（24.4%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は141人（68.8%）であった。一方、「卒業高校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は13人（23.3%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は38人（67.8%）であった。

表9 卒業高校の所在地[設問1]と引用の仕方[設問13]とのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
沖縄	14 6.8	41 20.0	64 31.2	77 37.6	7 3.4	2 1.0	205 100.0
沖縄 県外	3 5.4	10 17.9	18 32.1	20 35.7	4 7.1	1 1.8	56 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 100.0
合計	17 6.5	51 19.5	82 31.3	97 37.0	11 4.2	4 1.5	262 100.0

表9は、卒業高校の所在地[設問1]と引用の仕方[設問13]とのクロス集計結果を示したものである。

表9より、「引用の仕方」について、「卒業高校の所在地」が「沖縄県」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は55人（26.8%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は141人（68.8%）であった。一方、「卒業高校の所在地」が「沖縄県外」であった回答者の否定的回答（回答番号1及び2）は13人（23.3%）、肯定的回答（回答番号3及び4）は38人（67.8%）であった。

以上のクロス集計結果からは、高校所在地が沖縄県であった回答者の方が、図書館の利用に関わる理解度について、相対的には肯定的回答をしている者の割合が高いことがわかる。

しかしながら、それぞれの集計結果にあらわれた差について、自由度4の $\chi^2$ 検定による独立性の検定の結果、1%水準で棄却できなかった。つまり、卒業高校の所在地（沖縄県か沖縄県外か）により図書館の利用に関わる理解度の度数分布に差はないと考えられる。

#### 4. 2 学習経験と理解度の意識について

設問8から設問13について、高等学校までの図書館に関わる学習経験が、理解度にどの程度関連性があるのか確認するため、それぞれ設問Aと設問Bとのクロス集計を行った。

表10 図書館の利用の仕方[設問8]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	3 1.7	15 8.6	84 48.3	63 36.2	7 4.0	2 1.1	174 100.0
N	4 4.7	16 18.8	32 37.6	22 25.9	11 12.9	0 0.0	85 100.0
無回答	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 100.0	3 100.0
合計	7 2.7	32 12.2	116 44.3	85 32.4	18 6.9	4 1.5	262 100.0

表10は、図書館の利用の仕方[設問8]における設問Aと設問Bとのクロス集計結果を示したものである。

表10より、「図書館の利用の仕方」について、「高校までの授業で学習したことがある(Y)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は18人(10.3%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は147人(84.5%)であった。一方、「高校までの授業で学習したことがない(N)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は20人(23.5%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は54人(63.5%)であった。

表11 図書館の分類[設問9]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	3 2.3	22 16.7	84 48.3	53 40.2	4 3.0	1 0.8	132 100.0
N	6 4.7	38 29.7	46 35.9	26 20.3	12 9.4	0 0.0	128 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	1 50.0	0 0.0	0 0.0	1 50.0	2 100.0
合計	9 3.4	60 22.9	100 38.2	75 28.6	16 6.1	2 0.8	262 100.0

表11は、図書館の分類[設問9]における設問Aと設問Bとのクロス集計結果を示したものである。

表11より、「図書館の分類」について、「高校までの授業で学習したことがある(Y)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は25人(19.0%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は137人(88.5%)であった。一方、「高校までの授業で学習したことがない(N)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は44人(34.4%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は72人(56.2%)であった。

表12 図書館の目録[設問10]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	2 1.3	17 11.0	76 49.4	51 33.1	5 3.2	3 1.9	154 100.0
N	6 5.6	31 29.0	33 30.8	25 23.4	9 8.4	3 2.8	107 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	1 100.0
合計	8 3.1	48 18.3	109 41.6	76 29.0	14 5.3	7 2.7	262 100.0

表12は、図書館の目録[設問10]における設問Aと設問Bとのクロス集計結果を示したものである。

表12より、「図書館の目録」について、「高校までの授業で学習したことがある(Y)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は19人(12.3%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は127人(82.5%)であった。一方、「高校までの授業で学習したことがない(N)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は37人(34.6%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は58人(54.2%)であった。

表13 百科事典などの索引[設問11]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	1 0.6	11 6.7	48 29.3	101 61.6	2 1.2	1 0.6	164 100.0
N	8 8.6	29 31.2	29 31.2	19 20.4	8 8.6	0 0.0	93 100.0
無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	5 100.0	5 100.0
合計	9 3.4	40 15.3	77 29.4	120 45.8	10 3.8	6 2.3	262 100.0

表13は、百科事典などの索引[設問11]における設問Aと設問Bとのクロス集計結果を示したものである。

表13より、「百科事典などの索引」について、「高校までの授業で学習したことがある(Y)」の回答者の否定的回答(回答番号1及び2)は12人(7.3%)、肯定的回答(回答番号3及び4)は149人(90.9%)であった。

一方、「高校までの授業で学習したことがない (N)」の回答者の否定的回答 (回答番号 1 及び 2) は 37 人 (39.8%)、肯定的回答 (回答番号 3 及び 4) は 48 人 (51.6%) であった。

表14は、レポートの書き方 [設問12]における設問Aと設問Bとのクロス集計結果を示したものである。

表14 レポートの書き方 [設問12]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

設問	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	0 0.0	3 10.3	7 24.1	17 58.6	2 6.9	0 0.0	29 100.0
N	11 4.8	47 20.7	78 34.4	78 34.4	12 5.3	1 0.4	227 100.0
無回答	1 16.7	0 0.0	1 16.7	0 0.0	0 0.0	4 66.6	6 100.0
合計	12 4.6	50 19.1	86 32.8	95 36.3	14 5.3	5 1.9	262 100.0

表14より、「レポートの書き方」について、「高校までの授業で学習したことがある (Y)」の回答者の否定的回答 (回答番号 1 及び 2) は 3 人 (10.3%)、肯定的回答 (回答番号 3 及び 4) は 24 人 (82.7%) であった。一方、「高校までの授業で学習したことがない (N)」の回答者の否定的回答 (回答番号 1 及び 2) は 58 人 (25.5%)、肯定的回答 (回答番号 3 及び 4) は 156 人 (68.8%) であった。

表15 引用の仕方 [設問13]における設問Aと設問Bとのクロス集計表

	1	2	3	4	5	無回答	計
Y	0 0.0	5 12.5	17 42.5	17 42.5	1 2.5	0 0.0	40 100.0
N	16 7.5	45 21.0	64 29.9	80 37.4	9 4.2	0 0.0	214 100.0
無回答	1 12.5	1 12.5	1 12.5	0 0.0	1 12.5	4 50.0	8 100.0
合計	17 6.5	51 19.5	82 31.3	97 37.0	11 4.2	4 1.5	262 100.0

表15より、「引用の仕方」について、「高校までの授業で学習したことがある (Y)」の回答者の否定的回答 (回答番号 1 及び 2) は

5 人 (12.5%)、肯定的回答 (回答番号 3 及び 4) は 34 人 (85.0%) であった。一方、「高校までの授業で学習したことがない (N)」の回答者の否定的回答 (回答番号 1 及び 2) は 61 人 (28.5%)、肯定的回答 (回答番号 3 及び 4) は 144 人 (67.3%) であった。

設問 8・12は自由度8、設問 9・10・11は自由度4、設問13は自由度12の $\chi^2$ 検定を行ったところ、すべて1%水準で独立性の仮定が棄却できた。つまり、高等学校までの図書館に関わる学習経験がない学生ほど、現状の理解度について否定的回答をする傾向が高いことが明らかとなった。

### 5. 考察

以上の調査結果を踏まえながら、あらためて、本稿における目的 2 点を確認し、考察を加えることとする。

第一に、将来教職をめざす可能性のある教職課程を履修する大学生が、これまでの学校図書館利活用経験をどのように認識しているのか明らかにすることであった。

これについては、設問 8～設問 13における集計結果から、図書館 (学校図書館) そのものの仕組み (本の並び方や利用方法) については、過半数の学生が学習経験として理解していると肯定的に回答していたものの、大学における学びにおいて求められるレポート作成などに関わる作法 (レポートの書き方、引用の仕方) については、高等学校段階までの学校図書館利活用経験が十分には生かされていない可能性があることが明らかとなった。もちろん、レポート作成に関わる作法についての指導や支援は、学校図書館だけがその責務を負っているわけではなく、すべての教科にわたって指導すべき探究活動の一環ととら

えるべき事柄ではある。学校図書館活用教育という視点から考えるならば、学校図書館活用教育の高大連携という観点からも捉えなおす必要があるだろう。ここでは、一例として高大連携を取り上げたが、高校卒業後の進路として進学だけではなく、就職へ向かう子どもたちのためにも社会人として生きてはたらく図書館活用教育であることも求められよう。

第二に、教育職員免許法上の免許取得要件となる、教育課程及び指導法に関する科目における学校図書館機能の利活用について取り扱うことの意義について考えてみたい。

周知の通り、現行の学習指導要領においても、その総則において「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。」が謳われている。また、国語科を基盤としながら、これからの社会を生き抜くために必要とされる課題解決能力を育む言語活動として、「単元を貫く言語活動」を設定して授業づくりに取り組むことも求められている。これは、学校の授業の中だけに閉ざされた言語活動ではなく、子どもたちが日常の経験・体験と重ね合わせながら意味ある言語活動として認識できるよう、授業づくりを行っていくことが求められているのである。

すでに、小・中・高等学校版として、それぞれ『言語活動の充実に関する指導事例集』も文部科学省より示されており<sup>18</sup>、学校図書館を計画的に利活用できる教員養成も司書教諭か否かにかかわらず求められている。教職を志望する学生にとって、学校図書館利活用教育の原体験は、自身の母校での利活用経験であることは確かである。その原体験を豊かなものとしていくためにも、これから教職に就く可能性の高い教職科目履修者である学生

には、学校図書館利活用教育へのまなざしを少しでも豊かなものにして、意図的・計画的に学校図書館を利活用しようとする意識をもってもらうことが肝要である。そのためにも、志望免許の校種・教科にかかわらず教育職員免許法上の免許取得要件となる、教育課程及び指導法に関する科目において、学校教育における学校図書館利活用のあり方を意識的に組み込んでいくことが求められる。

## 6. おわりに

教職課程を履修している学生にとって、高等学校段階までの学校図書館利活用経験がない場合、将来教員として最低限必要と思われる図書館機能への理解度についても否定的な回答となっていることが明らかとなった。これらの問題を踏まえて、教育職員免許法上の免許取得要件となる、教育課程及び指導法に関する科目において意図的に学校図書館利活用のあり方を学生自身の原体験を省察しながら考えていく必要性を指摘した。本稿においては、教育課程及び指導法に関する科目において、限られた講義時間数のなかでの具体的な講義内容については、言及できなかった。今後、具体的な科目として、「教育課程」及び「教育方法」科目において、学校図書館の計画的な利活用に関わる講義内での取り上げ方について検討するとともに、学生の履修後の変容についても考察していきたい。

---

もちづき みちひろ：琉球大学

【註及び主要参考文献】

- <sup>1</sup> 大学図書館では、東北大学で継続的に刊行している情報探索テキスト『東北大学生のための情報探索のための基礎知識』がある。レポート作成というコンテクストを前提とした内容構成となっている。2007年には基礎編、自然科学編、人文社会科学編の3編がでそい、はじめて全学の学問分野を網羅したテキストとして完成した。琉球大学においても、『琉大生のための情報リテラシーガイドブック』として、2010年より毎年改訂が加えられながら継続刊行されている。このように大学図書館における利用教育の状況は、情報探索法中心から、レポート作成法を起点とする情報リテラシー教育へシフトしており、大学図書館の課題とされてきたところである。
- <sup>2</sup> 琉球大学における司書教諭資格取得に係わる5科目の履修登録人員の上限は、次の通りである。教室の収容可能人数との関係により、「学校経営と学校図書館」「学校図書館メディアの構成」「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」の4科目については、60名定員としている。また、「情報メディアの活用」科目については、40名定員としている。本稿冒頭にも述べたとおり、本調査は、2009年度から2011年度にかけて実施しているが、琉球大学全体での教員免許状取得者数と司書教諭資格科目の履修者数の対比で取り上げるならば、次の資料が参考になろう。平成22年度教員免許課程認定大学実地視察に関わり公表された「実地視察大学の概要：琉球大学」  
<[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/10/19/1312095\\_12.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/10/19/1312095_12.pdf)>  
(2013年10月30日最終確認)によれば、2009(平成21)年度の琉球大学における教員免許状取得者数は、全学部合計278人であった。
- <sup>3</sup> たとえば、2012(平成24)年度「学校図書館の現状に関する調査」結果(文部科学省、2013年

3月)においては、沖縄県におけるいわゆる学校司書の配置学校の割合として、公立小学校で97.8%(全国47.9%)、公立中学校で91.3%(全国47.6%)、公立高等学校で100.0%(全国71.0%)といずれの校種においても全国平均を大きく上回る配置率であることが確認できる。このような、沖縄県における学校図書館への人の配置率の高さについては、安藤友張の論考(「1950-60年代の日本における専任司書教諭の配置施策」『日本図書館情報学会誌』55(3)、2009年9月、pp.172-194.)や漢那憲治の論考(『米軍占領下における沖縄の図書館事情：戦後沖縄の図書館復興を中心に』京都図書館学研究会、2014年)においてもその特徴的な施策により達成されてきたことがうかがえる。

- <sup>4</sup> 2008年度から2014年度版『琉球大学案内』(パンフレット)の「入試統計」によれば、学部学生の沖縄県内出身者の割合は、62.9%から70.6%の間で推移しており、少なくとも6割以上が沖縄出身者で占められている。
- <sup>5</sup> 「学校図書館法」一部改正後も、同法附則第2項において、「学校には、平成十五年三月三十一日までの間(政令で定める規模以下の学校にあつては、当分の間)、第五条第一項の規定にかかわらず、司書教諭を置かないことができる。」とあり、概ね11学級までの規模の学校にあっては、司書教諭を「置かないことができる」という特例が謳われているものの、本来、「司書教諭を置かなければならない」と謳われていることに留意すべきである。
- <sup>6</sup> 石川清治「学生の図書館利用学習：教授形態との関連において」『図書館界』17(2)、1965年10月、ページ不明。及び、石川清治「教授形態との関連における学生の図書館利用学習についての一考察」『琉球大学教育学部紀要』(10)、1967年3月、pp.41-56。が挙げられる。
- <sup>7</sup> たとえば、以下の論考が挙げられる。  
久保田昭子「慶応義塾大学文学部図書館・情報科学学生の文献利用調査(慶応大学文学部図書

館・情報学科創立二十五周年記念特集号)『Library and information science』(14)、1976年、pp.193-209.

佐藤隆司「学生の図書館利用調査について：比較研究のための予備的考察」『図書館短期大学紀要』(12)、1976年、pp.99-108.

深川恒喜〔ほか〕「大学生を対象とする図書館利用指導について」『武蔵野女子大学紀要』(11)、1976年3月、p.29-36.

- <sup>8</sup> 岡田靖「大学における学生の図書館利用に関する調査報告-1-」『図書館学会年報』24(2)、1978年6月、pp.89-96.

1977年と1992年の調査結果を踏まえて、以下の論考としてまとめられている。

岡田靖「大学生の図書館利用の学年による変遷」『鶴見大学紀要 第4部 人文・社会・自然科学篇』(30)、1993年3月、pp.173-191.

- <sup>9</sup> 岡田靖「大学生の図書館利用に関する調査報告-2-」『図書館学会年報』40(4)、1994年12月、pp.181-191.

岡田靖「大学生の図書館利用に関する調査報告と分析：相関データを基に」『鶴見大学紀要 第4部 人文・社会・自然科学篇』(32)、1995年3月、pp.237-254.

- <sup>10</sup> 中島正明「大学生の図書館利用に関する研究：本学におけるアンケート調査を中心に」『安田女子大学紀要』(10)、1982年、pp.17-32.

- <sup>11</sup> 佐藤充昭「大学における学生の図書館利用に関する調査報告：九州・沖縄地区大学調査-1-」『図書館学』(66)、1995年3月、pp.43-51.

及び、

佐藤充昭「大学生の図書館利用に関する調査報告と分析：図書館利用教育と図書館における行動及び知識との相関データを基に」『図書館学』(69)、1996年3月、pp.30-36.

- <sup>12</sup> 鈴木嘉弘「本学入学時における新入生の図書館活用力調査」『常葉学園大学研究紀要：教育学部』(17)、1996年1月、pp.1-14.

- <sup>13</sup> 川原亜希世「学生の図書館利用経験から図書館

利用教育の意義について考える：北陸学院短期大学『情報サービス論』の授業実践に基づく一考察」『近畿大学短大論集』34(1)、2001年12月、pp.31-40.

- <sup>14</sup> 野口武悟「大学新入生の図書館利用経験と意識を探る：S大学J学科の新入生を対象としたアンケート調査から」『図書館総合研究』(10)、2010年8月、pp.41-54.

- <sup>15</sup> 前掲書14、p.41.によれば、当該科目は、「新入生を7クラスに分け7名の教員で担当するもので、大学生活の過ごし方、授業の受け方、勉強の仕方、図書館を活用した情報収集の仕方、文章の読み方、書き方、発表の仕方、キャリアデザインなどの基礎的な内容を少人数のゼミナール形式で指導するもの」となっている。

- <sup>16</sup> 前掲書13、p.37.では、「学生が学んできた小中学校のほとんどには学校司書や司書教諭がおらず、図書館活動は読書教育を中心に行なわれていた。」と述べられている。

- <sup>17</sup> 全国SLA編『情報を学習につなぐ：情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説』全国SLA、2008年、pp.46-47.

- <sup>18</sup> 文部科学省編『言語活動の充実に関する指導事例集：思考力、判断力、表現力等の育成に向けて』教育出版、2011-2014年。(小学校版、中学校版、高等学校版の順に刊行されている。)